

私の半生・修養雑話

野間清治



野間清治

めて早く御礼申し上げます。
 副会長の活動として、講談社との交流、「野間清治と少年倶楽部」講談社の絵本展の開催、文化講演会の開催、野間文庫読書推進賞の設置、ふるさとの風「シリーズ」の発行などの多岐な活動を実施し、また

「雑誌王」野間清治

講談社を創業し、「日本の雑誌王」と呼ばれた野間清治は、明治十一年（一八七八）十二月十七日、群馬県山田郡新堀村（現在の桐生市新宿）に生まれました。

群馬県立師範学校卒業後、高等小学校訓導を経て東京帝國大学文科大学臨時教員養成所に入り、神興中学校教頭、神興思鏡学舎を努めた。

左衛門と結婚した後、東京帝國大学法科大学官費書記に就き、校内の緑会発起に尽力した。明治四十三年（一九〇九）十一月、東京市本郷区駒込込下町（現在の東京都文京区千駄木）に、「大日本雑誌会」の看板を掲げ、翌年「雑誌王」の発行であるという名で「発刊雑誌」「雑誌」を創刊した。その後「講談倶楽部」「少年倶楽部」「面白倶楽部」に「面白」「面白」二現刊部を相次いで世に出した。

大正十三年（一九二四）、「キング」を創刊した。大衆生産、大規模宣伝による廉価販売策をとり、日本で初めて発行部数が一百万を超える国民雑誌となった。

翌年「幼年倶楽部」を創刊し、九大雑誌を以って雑誌王に因講談社を築きあげた。「雑誌の本領は、雑誌にある」と、雑誌があればこそ、秩序も生じ、統一も生じ、変化も生じ、光榮も生じ、「を信念とし、「面白く、為になる」をモットーとして、大衆文化の向上に献身した。

野間清治の事業は、雑誌を通じて民衆教育と学校教育を補う役割を果たしたとして、徳富蘇峰は「雑誌王」を「私設文部省」と評した。

尚武の精神を父祖より受け道場を設けて剣道の普及に努め、文武両道を奨励した。

社内には少年部を設置して、群馬県を中心に多くの少年たちを採用し、日常の仕事のなかで生きた学習を学ばせ、有為の人間を育てるという独特の社員教育を実践した。

「世間雜誌」などを著し、人と人との和と、世界の調和を訴え、未来を託する青少年たちに精神糧を大切だと説いた。

昭和十三年（一九三八年）十月十六日、五十九歳にして急逝した。東京都文京区の護国寺墓地に眠る。

なお、桐生市立図書館に昭和五十四年十一月「野間文庫」が設けられ、野間清治社から毎年新聞が寄贈されている。

献花式

野間清治創刊七十年記念式典

野間 信子



講談社副社長 高野博徳氏

志あるところを自ら生み出すことを追求することと真剣な取り組みにあり

野間清治

「一周年は快晴れの好天だった。ヴァイオリンとピアノ演奏の中を純元二十名出席し白菊を講じた。昨年三周年を記念し、講談社社友会の方々がバス一台の多勢で献花式に出陣下さり、きのこ会館で仕食をした後福田でいんげんを供えて楽しんでくれたが、野間清治も多勢の方に白菊を供えられてどんなにか喜んでたことだろう。」

野間清治創刊七十年記念式典
 協賛 桐生市
 協賛 桐生市教育委員会
 協賛 講談社

平成十一年十一月二日

これらが彫られた石は、桐生川が流れる梅田から見つけ

今年も、十月十六日が近づいてくるが雨が降った事が無い。野間清治が亡くなった年に私が生れたのでその日を忘

